

創造力の 源泉、数学



小林俊行

東大に戻ってきた。五、六年ぶりである。

十八歳で入学して以来、二十四歳で助手（助教）、四年後に助教（准教授）と進み、気がつけば東大で過ごした年月が人生の約半分となった頃、私は東大を一度離れることにした。東大を離れている間、渡米してハーバード大学で大学院の講義を受け持ち、その後、数学の研究所として世界最高峰の一つといわれる京大数理解析研究所で教授をしていた。さらにフランスやドイツで短期の客員教授を務め、また中国や中欧でも講義をした。いったん母校を離れて外から眺めてみるのも面白い経験だった。

ハーバード大学では、私
が創り出した「離散的分岐
則の理論」を講義するよう
に依頼され、一回九十分、
週二回のコースを開講し

た。聴講者は大学院生より
もハーバード大学を訪れて
いる研究者の方が多かつ
た。聴衆の国籍はまちまち
で色々なお国訛りの英語で
質問が飛び交い、答えるこ
ちらも我を忘れて脱線した
りして、あつという間に十
分、二十分と過ぎてしまう。
数学の最先端で開拓しつ

ある研究領域を私と聴衆が
共にみつめていた。講義の
際の会話を契機にさらに理
論が発展するということ
も、一度ならずあった。こ
んなことが起こるのも、優
れた俊英たちが世界から集
まる場所であればこそであ
る。教える身にとつても楽
しい職場であり、ハーバー
ド大学の底力を垣間みる思
いであった。雪が解け日差
しが柔らかくなるにつれ私
の講義の聴講者の数が少し
ずつ増えていったこともま
た嬉しかった。

一方、京都に暮らしてみ
ると、学問を大事にする歴
史と独特の空気が肌で感じ
られた。研究所には世界中
からひっきりなしに数学者
が訪れて来た。このような

環境の中で京都の人々の、
こまやかで暖かい心遣いに
感激しつつ、のびやかな気
持ちで研究生活を送ること
ができた。

究極の普遍性を追求する
数学という学問であつて
も、その進歩は周囲の人々
の心や山河の自然によつて
支えられていると思わずに
はいられない。京都の町と
そこでお世話になった方の
ことは、一生感謝してもし
きれないくらい、心から感
謝している。

さて、東大の大学院の教
授としては、ポストドクや大
学院生に対する指導を行う
わけであるが、学部生にも
講義を行う予定である。

大学では、教えるプロが
講義をするのではない。最
前線で新しい理論を開拓し
ようとしている学者が、高
校を出たばかりの諸君に講
義をする意義とは何だろう
か。それは、単なる知識の
伝授のためとは思わない。
将来を期待されている学生
諸君が、第一線に立ってい
る研究者から創造の息吹や
学問の奥行きの高さを感じ
とることにこそ、大学にお
ける講義の意義があると私
は考えている。

私が駒場の学生であった
とき、教養科目の英語は小

田島雄志先生（シエークスピア研究の大家）に、ドイツ語は山本明先生（「新現代独和辞典」の編者）に教えていただいた。高校を卒業したばかりの私にとって、優れた学者の深い造詣や何か新しいものを生み出そうとする心意気を間近に感じた衝撃は忘れられない。今ふりかえってみると、こういった体験はその後の私の人生の大切な糧となっている。

東大では理系も文系も教養課程で数学を学ぶことになっている。そこでは一歩踏み込んで、新しい概念を積み上げて数学の理論が創造され展開されてゆくさまを学んでいただきたい。大学で学ぶ数学は高校数学を土台としているが、単なる延長ではない。

数学では、新しい理論が次々と生まれている。大学生という若い時期に数学の生命力と普遍性に触れることによって、学生諸君が将来どの分野に進んでも人真似でない新しいものを生み出すための「何か」を駒場では得ていただければこれにまさるものはない。

（数理）